

75年を祝して（その3、美波町）



美波病院 本田 壮一

2022年12月で、海部郡医師会は75周年になる。海陽・牟岐の両町に続き、美波町やその医療機関の現状を紹介する（ほとんどの写真は、22年3月に撮影）。

明治22年の町村制では日和佐村・赤河内村・三岐田村・阿部村となっていた上灘地域は、2006年3月に合併し美波町¹⁾が誕生した。南東は太平洋に望み、暖かい黒潮の良好な漁場がある。リアス式の海岸部は、鹿ノ首岬（陸けい島）や、臨時駅が隣接する海水浴場（田井ノ浜）、アカウミガメが産卵する大浜海岸、えびす洞（海食洞）、千羽海崖など変化に富んでいる（室戸阿南海岸国定公園）。古くから延縄や定置網などの漁業が盛んで、漁船団が五島列島など九州へ訪れた歴史がある。イセエビやアワビ・サザエが名産となっている。また、23番札所の医王山薬王寺は1円玉を置くと、厄落としになるという階段があり、観光地となっている。人口は、6,212人（22年2月）。にぎやかな過疎の町を目指し、サテライトオフィスを誘致している。

2001年日和佐道路の建設により、田井遺跡²⁾が発掘された（縄文時代前期末～中期、約5,000～4,000年前。図1）。石器を製作した跡とみられ



図1：日和佐道路の下にある田井遺跡

る遺構が発見され、土器・石器類が出土した。縄文人が、海を通じて広く交流をしていた証拠となっている。

その田井にある美波病院（本田壮一院長、50床。図2）は、2016年3月に高台に新築移転した（海拔22m、免震構造の3階建て）。常勤医は、筆者と外科医の2名。内科・外科に加え、整形外科や脳外科・耳鼻咽喉科を標榜している。それぞれ、徳島大学病院や県立海部病院などの非常勤医師に頼っている。他に、外来や当直勤務に、県医師会や、徳島赤十字病院・阿南医療センターから支援していただき感謝している。11年前の東日本大震災の教訓を生かし災害医療や高齢者・認知症診療に力をそそぎ、地域包括ケア病床（10床）やPT・OTによるリハビリテーションも行っている。



図2：美波病院

町内には、公立の診療所が2か所ある。奥河内にある日和佐診療所は、17年に完成した美波町医療保健センター内にあり、内視鏡やCTなど小病院並みの機器をそろえている。健康増進課や地域包括ケアセンター、社会福祉協議会、玉真病院「海辺のクリニック」（3階）が集まり、地域包括ケアの要と期待されている。阿部診療所は、機器

会員随想

の少ない診療所だが、稲次正敬先生（藍住町）らの支援で、診療を続けている。2月より上記3施設の院長・所長を私が兼任しており、後継者選びが急務となっている。

西河内にある^{とみた}富田病院（144床、阿部司郎院長。図4a）は、精神科の病院。障害者支援施設を併設し、「南部地域認知症疾患医療センター」に指定。PSWも在籍し、認知症診療に力を入れている。その日和佐川の上流（^{たんまえ}丹前）に、ヒワサクリニック（木田安宣院長、図4c）があり、併設のヒワサ荘（特養）や脳神経内科の診療が行われている。日和佐川の河口に近い場所に、イワキ医院（居和城宏院長、図4b）があり、日和佐浦の住民の信頼を集めている。さらに、美波保健所（南部総合県民局美波庁舎、図4d）は、郡尋香所長（阿南

保健所）が兼任勤務のため、保健師の方に連絡や相談することが多い。コロナ禍でのワクチンや陽性者の対応、休職期間など、徳島県庁の入院調整本部などとともに世話になった。

居和城武会長（故人）は、当地での医療活動の課題として、1）高齢者の増加、2）過疎（人口減）、3）災害（津波）対策と述べられていた（05年）。3年前より当時は思いもよらぬコロナ禍となったが、発熱外来やCOVID-19mRNAワクチンの集団接種を粛々と進めていきたい（広報担当委員）。

【参考URL】

- 1）美波町⇒<https://www.town.minami.lg.jp/>
- 2）田井遺跡⇒<https://www.pref.tokushima.lg.jp/rekishiru/remains/5022996>



図3：a. 日和佐診療所、b. 阿部診療所



図4：a. 富田病院、b. イワキ医院、c. ヒワサクリニック、d. 美波保健所